

2014.12.1

# 現代俳句千葉

115号

巻頭エッセイ

## 私の俳枕

幹事 矢野忠男



この言葉正確には成立しないものと訊かされてはいるが、まあそう堅い事は言わずに願いたい。たかだか片道二キロ程の運動がてらわが散歩道の事である。

鉄骨とセメントで固めた味気ない街を抜けだすには巾二メートル、長さ五十メートルばかりの歩道橋を渡れば事はすむ、要は高速道路を一跨ぎということだ。すぐに勾配を伴った小道になり右手には湿地を埋め立てた住宅群、左手は更に小高い山となり竹林に続く、豪農の屋敷を経て切通を登りきると鎮守様の社に着くほど道半ばである。さて枕をうたうからには、それなりの定点が必要だろう、季はややばらばらになるが許し願いたい。先ず各棟の脇には土が入り住人が勝手に花壇を形成して楽しんでゐる。ここでは春先のクロッカスが印象的だ、辺り一面の枯草の中に葉に似合わぬ大きな花は妙に艶めかしい。季節が進むと沈丁花が香り更に梔子の出番となる。一方此の頃になると椈の若葉が辺りをさみどりに覆い、桜を誘いあやめ杜若更に燕を呼んで初夏となる。勿論百舌にも出番はあり、

鶇が歌い雀がこぼれ掠鳥、たまにはカワラヒワさらには小鰯刺も見かける、夕暮れともなれば蝙蝠も健在である。とまあここ等迄が我が団地内の俳句の種である。そして先程の橋を渡った辺りから景色が一変する、所謂里山の様相を呈する。季節は後戻りするが社の参道近くに金縷梅が咲くと待つていたように野梅が続き目白が騒ぐ、勿論菜の花は黄色い絨毯を敷き墓地の境に辺りは畑作地帯、手前は耕した許りの落花生畑、道を挟んでハダマが少々その先に三月豆か？ この辺りは梅雨を挟んで鶯、蟬時雨と共に夏が来る。たらの芽、路煮、筍飯は堪能しおわった後である。水曜市を経て農家を何軒か過ぎるとS字坂は下りとなりモノレールが見えると第三ステージ動物公園である。紅葉はとも角、椎の実、柘榴、山栗いわゆる栽培種ではない山の幸が豊富だが、今の子供は見向きもしない。さて、園内に入ると左手は動物園、右手を少し行くと回遊式の日本庭園となる、此処に椈の実がなり烏瓜がからから赤い音を立てると冬が来る。野性の水鳥達にとってその安全性は高く楽園となる。ここへ雪でも降ってければ日本人特有の美意識は更に高まり名句の一つもと成る筈だが如何であろうか。「おいおい妙に自信がなさそうだがどうした」「それがさっぱり出来ない、俳句なんか嫌いだ……」

### 目次

私の俳枕	矢野忠男	1
秋の吟行会	国立歴史民俗博物館・佐倉城址	2～3
諸家近詠		4～6
津田沼研究句会、青葉研究句会報告		7～8
柏研究句会報告		8
新会員紹介・図書紹介・ひろば		9
会員・会友の近況		9～10
掲示板		10

# 秋の吟行会

## 国立歴史民俗博物館・佐倉城址

会場 国立歴史民俗博物館 平成二十六年十月二十六日

秋の吟行会が国立歴史民俗博物館・佐倉城址で行われました。総勢、五十八名の方が参加、歴博館内一階ロビーのガイダンスルーム前において、十時からの受付を済ませ、館内

(第一展示室／原始・古代／第六展示室／現代、企画展示／文字がたなぐ古代の日本列島と朝鮮半島等)、および館外(佐倉城址公園／タウンゼント・ハリス像、東京鎮台営所病院跡碑、暮らしの植物苑等)の見所を吟行しました。

句会は、十二時の投句締切の後、館内レストラン、さくらからの仕出し弁当の昼食をはさんで、午後一時十五分から開始、夕方四時四十分頃に盛会裡に終了しました。司会は事務局の高木一恵・高橋宗史、披講はイザベル真央・野口京子・細野一敏の各氏。句会の後、京成佐倉駅前「庄や」に移動、有志による懇親会が行われました。まずまずの好天、佐倉十一万石城下町の雰囲気をも満喫した一日でした。

最後になりますが、今回、歴博(正式名称…大学共同利用機関法人人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館)施設の使用許可を得るに

あたっては、地元会員・清宮 誠(俳号…迷走子)氏と(清宮氏を通じて)歴博・荒川章二教授に貴重なアドバイスを頂きました。茲に記して厚く御礼申し上げます。  
(檜垣梧樓記)



句会風景

### 【入賞者作品】(二句のうち一句)

- 鳥渡るころか埴輪の泣くころか 細根 栗
- やや冷えて埴輪に厚き土不踏 加藤 法子
- 団栗ころころ骨に眼の穴鼻の穴 大畑 等
- 人骨に飾られている秋思かな 小林 実
- 深秋や何か言いたき埴輪の目 野口 京子
- また誰のものでもあらぬ木の実降る 塩野谷 仁
- 下がり目の耳なき埴輪秋の声 重田 忠雄
- ・縄文的空間が好き小鳥来る 木之下みゆき
- 櫻もみじ佐倉連隊便所跡 イザベル真央
- ・平安京の真葛原呼ぶ押しボタン 市川 唯子
- 歴博無風木の実が焦れている 秋尾 敏
- 動くものあらず城趾の草もみじ 小林 俊子
- シベリアのことは語らず鯛雲 吉田 耕史
- たましいは土偶のまぶた水の秋 諸藤留美子
- 柿熟るる自由な空の真ん中に 保坂 末子
- ・秋蝶の埴輪の口にぽつと生れ 松澤 龍一
- 仮名文字のなりたち如何に鳥渡る 富澤さち子
- 原点は男と女木の実落つ 村上 澄子
- ・戦争と平和どんぐり急ぐなよ 山中 葛子
- 人面の壺の中なる草の花 渡辺 澄
- 【その他参加者作品】
- 稲の秋戦さ始まる深き河 池田 博臣
- 竹の春暗闇坂を二三人 岩崎 令子
- 姥が池を掠めて髻咕蜻蛉かな 内田 庵茂
- さやけしや縄文女性現れし 内田 正成
- この坂は土偶へ繋ぐ水の秋 笈沼 早苗
- 吾もまた秋蝶となり一の門 大見 充子

秋冷やすすべての城は亡びたり  
 父母の顔浮き出る銅鏡秋深し  
 竹林を抜けて青空武家屋敷  
 空堀にささやきかける草紅葉  
 なんとつて国立歴史にひたる秋  
 秋たける明治を第五展示室  
 秋の声礎石並べる辺りより  
 鑑真の写経の文字や秋の声  
 碑に刻まれし文字天高し  
 昼ちちろ地霊鎮める姥が池  
 秋うらら仮面のままで生き急ぐ  
 冬日向無念の兵士の集う城  
 種籾を籠めて祈りの朱塗り壺  
 桜紅葉古代語聞こゆパピブと  
 嗚呼秋思何を問いかけ土偶かな  
 六世紀同じたれ目の埴輪群  
 実むらさき埴輪の恋がよみがえる  
 人形の胸の釘あと寒椿  
 脈々と古代から今日秋深む  
 天高し遡りゆく弥生の世  
 ひよんの実の向こうに人面土器の声  
 城跡や秋さくさくと踏み出しぬ  
 月明や大鋸互ひ違ひに挽く  
 国防色にこの国染めて泡立草  
 馬とつながり竪穴住居草の花  
 秋高しかかあ天下の縄文人  
 秋惜しむまほろば佐倉城趾かな  
 緑青あざやか大和民族の晩秋

岡田 春人  
 岡田 淑子  
 小高 稔  
 小野 功  
 金子 未完  
 清野 敦史  
 楠見 恵子  
 久保 筑峯  
 小多田文子  
 佐藤 鈴子  
 白木 暢子  
 清宮迷走子  
 高木 一恵  
 高橋 宗史  
 高橋 博  
 寺町 明美  
 徳吉洋二郎  
 栃木 きよ  
 なかもと淑子  
 棗 梢伊  
 並木 邑人  
 林 阿愚林  
 檜垣 梧樓  
 藤井 遥  
 藤田 富江  
 細野 一敏  
 増田 豊子  
 三上 啓



上位入賞者 細根さん、大畑会長、加藤さん



清宮さんの挨拶



塩野谷顧問と木之下さん



披講のイザベルさん

・初紅葉日矢を集めて馬隠し 矢野 忠男  
 小径いずこへ空堀の秋長けて 山口 明  
 この中に入らないで下さい残る虫 横須賀洋子  
 タイムスリップ幾世の秋に身を任せ 吉野 精  
 (作品の上の・印は正副会長、顧問特選)



秋尾副会長と山中顧問



並木副会長、市川さん、山中顧問



渡辺副会長と木之下さん



大畑会長と矢野さん



檜垣副会長と小林さん



横須賀顧問と松澤さん

## 諸家近歌

噴水の白き翼に退院す

山崎 芳子

老残の彩は見せまじ七変化

夫を看る体力もがな夜の蟬

在天の学徒よ友よ原爆忌

十一時二分わたしの袴り長崎忌

内田 庵茂

影はみな足より伸びて雲の峰

真つさらな空へ物干すサンガラス

夏の果潰せしポトル戻る音

オール漕げば後ろに進む秋の風

いづくかに偵察衛星稲の秋

青木 一夫

新秋の鼻つばしらがむず痒い

爽やかな出会いのあとはいつも風

蟬の鳴く木を中流と思いきり

空の疵さがしつづける秋の蝶

秋天は好青年のようなもの

秋谷 菊野

のぞく子がいない通草の口ばつくり

妹よコスモスよこのしたたかさ

夏休み腹這いになって読む力フカ

詫び状がまだ届かない敗戦日

父さんの飯粒拾う今朝の秋

相原 一枝

引っ張って開ける缶詰多喜二の忌

花びらの地に着くまでのひかりかな

七転びぐらいは平気鬼栄螺

生きるとは今光ること草堂

生きるとは顔上ぐること冬薔薇

花辛夷太古の蝶の羽化かくや

宇佐見房司

木洩れ日を浴び森番の木の実植う

青面金剛茗荷つ子らに囲まるゝ

土手越しの筑波嶺蒼し昼の月

大利根の上に綿雲素十の忌

石崎多寿子

向日葵にダリの時計を掛けておこ

雲行きを怪しき昼を鰻食ふ

夏雲に押されてデモの端にゐる

蛇は穴にやうやく紐の解けたり

地に葡萄熟るる月食すすむなり

岩尾 可見

八十の傘かぶりて拝む初日の出

児のはしる落葉のはしる音は風

狐の子使いこなせぬ二枚舌

「またあした」声の消えゆく冬の霧

縁側にふらりとやってきた小春

浦野 五郎

牛膝付け来て話はずみけり

帰れない人が見てゐる秋夕焼

夕されば朝あること蚯蚓鳴く

魯田やまだ青々とその気充ち

朝寒や始発しづゝ入線す

荒井 玲

貴種流離譚校しべ降り敷きる

葉ざくらとなりぬ書を捨て街に出よ

纏足という昔あり蓮の華

梅干して疑心暗鬼を収めたる

新しい下駄そろえたり獺祭忌

空ビルを走り続ける非常口

蛭名 節昌

鉄橋や記憶のように来る電車

哲学の木に一枚の夕景色

曼陀羅を向いて夫婦の屏がいる

横書きの黄泉平坂風立ちぬ

岡崎 翠

約束の又ながれさう桜餅

点ほどの緋メダカ線になり泳ぐ

秋灯停年のなき嬢座かな

二人なら不揃ひもよし零余子飯

夕野分裏木戸の猫体当り

イザベル真央

鷹渡る海の夕陽を惜しみつつ

満月の迷って曲がる島路

イラブーの動く袋や仏桑華

猫の鼻拭いてやるなり桜桃忌

生みたがる少女幼し梅雨の月

秋尾 敏

忘れないための消しゴム原爆忌

泉渾々老いたエリーゼのために

雲の花野に永遠の子どもたち

獺祭忌眼鏡に空を置き忘れ

霧重き砂丘滅びの坂いくつ

秋葉 紅陽

ままならぬ墓誌の順番秋彼岸

花火果てもとの星空戻りをり

しんがりへ涙腺ゆるむ体育日

待ち合ひの時間に余裕菊日和

いつか来る何時のための防災日

## 諸家近歌

遠藤 寛子

落し物置き場に増える冬小物  
ふなっしー振り落としたるサンタ帽  
子のために鍋焼さうどん蓋に分け  
眼鏡置く現実となるおでんかな  
障子張り子の近づけぬ部屋となる

大川富美代

大漁の浜を俯瞰す鯛雲  
ザックより取り出すルーベ茸狩り  
山気浴び朝採り茸引き締まる  
頭ほどの舞茸買ふも旅なれば  
うろこ雲叢の波と光り合ふ

明石春潮子

断片のような復興だから亀が鳴く  
橋渡り切らずがよしと思う秋  
たましいの蒼く乾きて落し水  
神も病むこともありけり稲を刈る  
手鏡の奥の花野にいるほとけ

岡田 淑子

弟よ古賀メロディーの夏が来た  
災天をどすと象の土踏まず  
まだ夏の残れる帽子洗いおり  
足湯して足置いてくる十三夜  
名月にうさぎの切手貼っており

大川 園子

一笑に伏さるも晩夏夢を追う  
裸木のひっそりと待つ野望かな  
頑具箱ひっくり返して夏果てぬ  
衣更え身の内何も変えられず  
盆踊り勝手に手足まぎれ込む

渡辺 礼子

釣り人は魚に釣られてかに歩き  
大南風遠い情熱甦る  
蜂の巣を育てておりぬ物忘れ  
短か夜を削るしかない亀の足  
きっかけはプールに濡れて勇氣凜凜

近江喜代子

乳母車へ喃語で応えのどけしや  
堪える力すでに鬨値や花の散る  
木の芽雨持ち重るほど処方薬  
空豆の莢父母の庇護ありし頃  
梅雨の月壺になりきるヨガポーズ

石井紀美子

くるつと過去へまわる鉄棒雲の峰  
落し文拾えば風の音がする  
蟻地獄に落してしまつた記憶  
一言に縛られている蟻の列  
子が駆ける母ののひら大花野

新井 秋芳

かたくなに雲寄せ付けず望の月  
捨て案山子諸手を挙げて何叫ぶ  
良寛の天地の二文字水仙花  
木立みな雪の白さを余白とす  
秘めごとはなべて筒抜け枯れ木立

上野 紫泉

柏楨に鳶を眠らせ十三夜  
露天風呂その延長は錆蝕に  
木の実降る眼球深き磨崖仏  
霧襖天上人となる一瞬  
蘆の穂絮揺らしてゆくや梓川

井上きよ美

ふんだんに飲める水あり原爆忌  
越境へ許可なく迂る蛇の舌  
想い出の糸をひきゆく秋の蝶  
啄木鳥の時どき人を見て突く  
冬の蜂忍者のごとく腕に在り

岡田 信子

賜りし命実録敬老日  
原節子今観る昔の秋日和  
今時の南瓜に目鼻ハロウイン  
焼芋や苦学の亡父のパンなりし  
冬支度サンタの梯子カラフルに

内田 正成

夏空にバンジージャンプ叫び声  
菊なます脳に突き刺す過ぎたる酔  
サハリンや海境いざこ秋の潮  
千枚田夜祭り光るノーベル賞  
夢追いし健康卒寿残り菊

伊東 靖子

三代で墓参のかなふ秋日和  
ふと湧きし言葉秋風さらけり  
二世帯の間合ほどよき栗御飯  
冬帽子女王階下と同一歳  
黄落や最後の恋文かも知れず

井上けい子

美しき狂気を秘めし酔芙蓉  
さまよひて赤き終止符鶏頭花  
流星をひとりの夜に招き入る  
濃霧の夜沼の蒼さに墮ちゆけり  
何事も無かつたやうに鳥渡る

## 諸家近詠

阿部 良治

大賀蓮地下で見たもの触れたもの  
郷に入り郷に馴んで百日紅  
銀ヤンマ古道巡りを日課とし  
台風来寄港タンカー異国文字  
秋風や各駅停車の手動ドア

秋山 冷子

城攻めは大手門より千の蟬  
児の試歩は起きあがりこぼし草の花  
落蟬の一声闇を深くする  
荒馬の潮牽して雲の峯  
籠城の庭師もあらん男梅雨

岡田美美子

旅立ちには口紅ひとつ冬の蝶  
正直に生きる桜の底力  
死ぬと言う大きな課題さくらんぼ  
穏やかな商い一途花木権  
金木屋家族の笑顔わが昭和

秋山 勝男

恋の句に強がり少しサングラス  
補聴器を欲しがっている蟬の穴  
眼の父似口元は母鳳仙花  
秋蚊打つメディアに踊る力瘤  
美人薄命木の実にもある運不運

大畑 等

万骨の覚め始めたる花筏  
人間を見ざる鶺鴒の目の荒野かな  
梅干して普陀落渡海忘れたり  
上って下って女を捨てて滝の正面  
我が息の浮輪あるなり我ならず

池田 幸

大晦日夕日沈むをみとどけり  
網持ちて童小川の春掬う  
簾より透けゆく先の余生かな  
現世の思い出撒きゆく花火かな  
紫陽花や余生に未知の雨雫

石井 浩美

罫雲のこして夜のきてゐたり  
空缶を蹴つて花野を明るくす  
食卓にひらくパソコン色鳥来  
スカイツリー同じ高さに秋の雲  
泣き顔を猫に見られし菊日和

岩崎 令子

古書店の少年倶楽部鳥雲に  
寒に入るぬつと写楽の大首絵  
カルメンがまつすぐに来る枯野かな  
風景の一つが歪み冬の沼  
薔薇真紅睫の長い人といふ

興津 恭子

寒暄を確かめており温度計  
厳寒のちよつと寝惚けて電子辞書  
筑波嶺の黒々近し寒に入る  
手袋へ孤独の夢を詰めている  
首を振る重機獣めく冬野

太田まさ子

綿虫へ青臭き眼を見舞かす  
秋雨に煙突群の蜃吐くや  
影踏み釣瓶落しが子をさらふ  
誰れもぬ小春を猫の四方に熨す  
甘柿のいつもとなり火の不安

大木 雪浪

成る成らぬどの道行くも風花火  
空堀の朽葉に落葉積む城址  
吹き溜まる寺院の落葉こそ落葉  
蜘蛛の糸登る朝顔虚に遊ぶ  
住み古りて人を見る目がある蜥蜴

岡田 春人

箸使ふものだけ食べる生身魂  
上品な妻無花果のかはをむく  
秋深し九条に平和賞待つ  
地球温暖化台風凶暴化  
ケイタイもスマホも持たぬ小鳥来る

岡山 敦子

仙人の住むと言ふ森蔦もみぢ  
大雨水残し台風海に去る  
竹とんぼとんぼとなりて野に遊ぶ  
猿酒甲斐の山並あかく昏れ  
迷はずに進む魚影や水澄めり

飯島 昭子

野の花も母に供へて盆の墓  
乱舞する螢の闇の静けさよ  
忌も祝ぎも減りし顔ぶれ半夏生  
捨てきれぬ地方新聞秋祭  
黄落や絵本の中に落ちしまま

小川トシ子

つくづくと人間うれしきくら餅  
桜葉ふるふるとおい日の背中  
まだ何か言いたき極寒の晴れ  
だしぬけに細胞のこと春の宵  
みどりの日回游魚のように銀座

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二六七回 (平成二十六年八月十二日)

司会 金子 未完

盆に来て真面目にやれと妻の言う  
線香花火ときどき正気まだ戦後  
桃食べて溪の深さをたずねけり  
天空寂しからんや干瓢干す  
小便をして静かなる蛾と別る  
一匹の蟻のうろつく数珠のなか  
金魚鉢蘭鑄の死をまだ知らず  
空き家増え守宮社会になりにけり  
朝には骸となりて黄金虫  
長崎の鐘はみがかれ天の河  
はなつから線香花火でもうおしまい  
ふたり分いがりの利いた冷奴  
ひまわりの刈上げ頭青々と  
落ちた蟬まだ歌うことせぬうちに  
まつすくなひとさしゆびを待つ蜻蛉  
夏草や大岩小岩沈みいく  
車椅子数多くりだす炭坑節  
処暑いまだ空恐ろしやプーチン

吉野 精  
横須賀洋子  
小林 実  
金子 未完  
後藤 章  
大畑 等  
徳吉洋二郎  
大塚 弘毅  
股野 久子  
岡田 淑子  
佐藤 晏行  
山中 葛子  
楠見 恵子  
なかもと淑子  
白木 暢子  
林 阿愚林  
大村 錦子  
榎垣 梧樓

白木 暢子  
岡田 淑子  
後藤 章  
徳吉洋二郎  
吉野 精  
大畑 等

●第二六八回 (平成二十六年九月九日)

司会 横須賀洋子

桃二つ寂しき三つ置いてある  
名月にうさぎの切手貼って出す  
鶏頭や父とその犬恐ろしき  
終戦の日スプレー缶に穴あける  
跳ばされて向日葵となる児の帽子  
ひらがなの戦争ありき曼珠沙華

白木 暢子  
岡田 淑子  
後藤 章  
徳吉洋二郎  
吉野 精  
大畑 等

秋の暮さらわれてでも逢いたい  
多事多端蚊は何處神の庭  
秋の夜やをとこもすなる針仕事  
仏から少し距離置く秋の蟬  
芝刈機描き出したる縞模様  
いそいそと言う病気あるかな秋聞ける  
ざわめきに置いていかれた祭りの灯  
蝶結び新酒一本抱いてゆく  
守宮落つ上くちびるに触れもして  
柔肌は敵に見せるな夜の秋  
晩秋の遠くの音に小さき耳  
本当の涙は赤い九月雨  
ずぶぬれの猪豚走る芒原

横須賀洋子  
大村 錦子  
榎垣 梧樓  
林 阿愚林  
股野 久子  
金子 未完  
なかもと淑子  
山中 葛子  
楠見 恵子  
村上 澄子  
大塚 弘毅  
小林 実  
佐藤 晏行

●第二六九回 (平成二十六年十月十四日)

司会 小林 実

長き夜の向こう三軒ひとりずつ  
子規の忌の日暮里駅で水をおむ  
芋の煮ころがしと二枚目が好きな母  
執拗にボレロ秋刀魚の腸つまむ  
不覚にも唇奪われ緋のカンナ  
芒原少国民の兄が来る  
ぼんやりとたましいかしら青写真  
念仏や吹かれきし蚊の刺しどころ  
砂山にナイフは錆びて檸檬の香  
序曲のよう二人流れゆく花野  
長き夜や地球は月を犯しけり  
大根をつくれ銃弾つくらずに  
空空空そらからくう木守柿  
美男女いずれにしても杜鵑草  
木犀の香に押されたり流動食

横須賀洋子  
岡田 淑子  
金子 未完  
大畑 等  
徳吉洋二郎  
佐藤 晏行  
楠見 恵子  
林 阿愚林  
小林 実  
山中 葛子  
村上 澄子  
吉野 精  
榎垣 梧樓  
なかもと淑子  
大塚 弘毅

山茶花の垣が誘う恋心  
空爆にキヤラメル持つて豊の秋

大村 錦子  
後藤 章



津田沼研究句会会場

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第六会議室)

●第三十八回 (平成二十六年八月二十八日)

司会 加藤 法子

勘違いの優しさだったバラ真つ赤  
冷酒にすわりの悪い椅子である  
秋の雷ページめくれしカフカの書  
八月の渡りきれない交差点  
絞め殺す現し身大暑の角帯は  
ラムネ玉青春回帰の音がする  
処暑に居て熱きサンバのDカップ  
蟬声の遠きを探りつつ死ねり  
夕薄暑胸の栓抜き見当たらず  
百足出で豊んだままの日章旗  
雌蟬は鳴かぬ平和憲法死守  
八月は独り歩きをしてならぬ  
曲がりなりに生きてその後茸飯

石井紀美子  
小林 実  
鈴木まんぼう  
細根 栞  
並木 邑人  
徳吉洋二郎  
矢野 忠男  
大畑 等  
長浜 聰子  
加藤 法子  
細野 一敏  
馬淵 津枝  
芝崎 梓

みんみんも油も熊も蟬時雨  
野を離れ実生の力野朝顔  
殻を脱ぐ酔いて新声油蟬  
暗闇でじつと我慢や蟬の鳴く

山崎 幸子  
三須 民恵  
小高 稔  
大塚 弘毅

●第三十九回 (平成二十六年九月二十五日)  
司会 大畑 等

風の盆人のかたちに町流れ  
ここまで来れば尾花の誘いも悪くない  
穴まどい逃げも隠れもせぬと言う  
化野の風になるまで曼珠沙華  
新宿は西口で会う疣毛り  
たましいを抜かれ棚田の捨て案山子

徳吉洋二郎  
芝崎 梓  
加藤 法子  
細根 葉  
小林 実

色鳥の知ってしまつた蜜の味  
秋風や歯は失せたるも朱き舌  
満月を齧ってみたき檻の熊  
秋の蟬つくづく孤独づく孤独  
トルソーの鎖骨の窪み九月尽

石井紀美子  
大畑 等  
鈴木まんぼう  
矢野 忠男  
長浜 聰子  
細野 一敏

毒毒毒毒毒毒毒展妻にある片鱗  
満月や私のこころ浮力かな  
あなたなるレールの音に和すちちる  
秋海棠急に女を思い出す  
満月や後ろ姿を見たいもの  
仇討の里に雨降り走り蕎麦

山崎 幸子  
大塚 弘毅  
三須 民恵  
小高 稔  
馬淵 津枝

●第四十回 (平成二十六年十月二十三日)  
司会 徳吉洋二郎

うつ伏せの詩魂ならある蛇穴に  
淋しさで人は死なない猫じゃらし  
生きものに生ききる力枯螳螂  
紅葉鮎水面のほつれ見逃さず  
ちよつとしたことに火が付き神の留守

大畑 等  
芝崎 梓  
椿 良松  
矢野 忠男  
馬淵 津枝

天高しやたらに深い臍の穴  
酒愛でる琥珀の時間十三夜  
かまつかや江戸の火消しを呼んでこい  
おつもりぞちんちろりんよまたいたか  
猫じゃらし取り巻く風を茶毘に付す  
紅葉狩振り向きたれば夜叉の居る  
秋の沼きつつき橋をつつく足  
さくら紅葉少し愛され忘らるる  
石叩き人の傷みを計り兼ね  
忍ぶ日の豊葦原の秋高し  
金木犀むかし浄土の片隅で

細野 一敏  
石井紀美子  
徳吉洋二郎  
加藤 法子  
小高 稔  
山崎 幸子  
三須 民恵  
長浜 聰子  
鈴木まんぼう  
細根 葉  
小林 実

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第二十八回 (平成二十六年九月十三日)  
司会 岡田 春人

満月の迷つて曲がる島の路  
びしょ濡れの男秋雷の駅から来  
秋服を五才若いといはれ買ふ  
満月にけものごとく見つめらる  
ばらばらに来て静かなる赤蜻蛉  
秋しぐれ湖に拡ぐる円周率  
秋出水壊れた時計鳴り通し  
石運ぶ妻ハイドンを聴く夫  
コルク栓すぽつと抜けて虫の宵  
わが耳を西日の中へ置き去りに

イザベル真央  
高橋 宗史  
岡田 春人  
下村 洋子  
大畑 等  
長井 寛  
野口 京子  
松澤 龍一  
佐藤 鈴子  
榎木 きよ

●第二十九回 (平成二十六年十月十八日)  
司会 岡田 春人

夕映えや荒野に潜むテロリスト  
凡夫にも鶏頭という勇氣欲し

松澤 龍一  
長井 寛

惚れそうな指で割らるる大柘榴  
霧生れて阻む山容九十九折  
茶を飲んで金木犀は死ぬところ  
螳螂の人近づけて離さざる  
紅葉の木々や乳歯の気になる子  
新涼の慈母観音の授乳かな  
無花果やふいに陽射しの古びたる  
猫に秋刀魚の骨やるを憎みけり

佐藤 鈴子  
小林 俊子  
大畑 等  
野口 京子  
高橋 宗史  
榎木 きよ  
下村 洋子  
岡田 春人

●第三十回 (平成二十六年十一月八日)  
司会 長井 寛

曼珠沙華無傷という傷ありしかな  
将門の首塚に花文化の日  
縄文語弥生語激しい落葉かな  
小鳥来る時々主婦になる漢  
ゆぶぐれの街じんたつたあじんたつた  
三つ目の酔牡蠣を口に入誂る  
噴火せる山裾はいま帰り花  
飯の世も彼の世も愛し寒雀  
身のどこか木枯を待つ洞がある

小張 直子  
イザベル真央  
高橋 宗史  
野口 京子  
松澤 龍一  
大畑 等  
伊藤 希眸  
長井 寛  
下村 洋子



柏研究句会場

## 新会員・会友紹介

千葉市若葉区 田中つとむ(会員)

(推薦者 大畑 等)

忘れ物取りに戻れば黄落期

霧一夜無色無臭の酒を酌む

仄かなる我が一灯や赤い羽根

船橋市丸山 片岡伊つ美(会員)

(推薦者 長峰 竹芳)

路地琴に一杓の水秋気澄む

世間より少し遅れて石路の花

ガードレール下の花東寒の雨

野田市岩名 三浦 侃(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

逃水のまだ描けない設計図

車椅子押す手休めし大牡丹

清濁を合わせ飲む世の鰯跳ねる

千葉市花見川区 神作 仁子(会員)

(推薦者 高野ムツオ)

直面の金春宗家淑気満つ

波音が言霊となり沖縄忌

幾人を送りし門や銀木犀

## 図書紹介

■『緩和時間』 越野 雄治

平成二十六年八月二十八日 現代俳句協会

天平の微熱ほのかに袋角

黙禱は何も祈らず沈丁花

辣蕪をカレーは嫌ひかもしれず

## ひろば

### ■第三十五回四街道市民文化祭俳句大会

日時 平成二十六年十一月九日

会場 四街道市文化センター

#### 源流主宰賞

混迷の世を塗りつぶす濃霧かな 佐藤 次雄

#### 市長賞

晩節の身に沁む業や冬紅葉 海老沼季衣

#### 議長賞

芒野や地中の気配隠しをり 齋藤 溥子

#### 教育長賞

人生は風とすぎゆく暮の秋 塚田恵美子

#### 千葉みらい農業協同組合賞

柿剥くや亡母のリズムを引き寄せて 浅見美代子

#### 商工会長賞

大根引く大根色の雲一つ 台野 弘昭

#### 第七位賞

独り居も暮るるは同じ冬銀河 望月 麗子

#### 第八位賞

受診終え釣瓶落しの家路かな 西村 峰子

#### 第九位賞

未完成の昭和の秋は画布の中 中村久仁子

#### 第十位賞

人の世の行きつく先やきりぎりす 下田 力

## 《会員・会友の近況》

・お盆過ぎに風邪を引き、軽いと思っていたらなかなか治らず、一ヶ月半経ってようやく治った感じです。(内田 庵茂)

・近隣の句友と東葛・取手地区の吟行をこゝ七〇八年毎月行なっており、今回お出しする五句は柏くんぶくろ他、取手利根川堤での作品です。柏のある団体の機関誌に本年一月から「かしわ歳時記」なる拙文を連載しております。忙しく日々が過ぎていきます。いつか時間が出来ましたら柏での研究句会にも出席させて頂きたく存じております。

・十月八日千葉公園の「好日亭」で千葉信子教室の吟行句会に参加いたしました。天候にも恵まれ楽しい時間を過ごしました。(宇佐見房司)

・数十年前はよく参加し楽しみを味わってききましたが、近年老々介護故苦悩、然し作句作業は変らず意欲は益々盛んです。(明石春潮子)

・千葉現俳の吟行等色々の行事大変楽しく参加させて頂いております。いつも行きとどいた気配りありがとうございます。(岡田 淑子)

・朝夕は寒さを覚える今日この頃、季節の移ろいを感じます。いつも皆様にはお世話になって居ります。(大川 園子)

・いつの間にかすっかり秋らしくなりました。(近江喜代子)

・「こんなにも轉りだれもない椅子」このたび自分史の一環と考へ句集を發刊することとなりました。十一月末頃を予定いたしております。よろしくお願いいたします。「轉りの椅子」といたしました。(上野 紫泉)

・老々介護、介護予防の教室で脳トレ、筋トレに楽しく励んでいます。(岡田 信子)

・数え年だと新年で九十歳に成ります。医療の進歩でこんなに長生きが出来有難い御時世と感謝して居ります。九十年の人生を時に思い出してはいろいろの体験をした世代でございますので感慨無量でございます。(伊東 靖子)

・「海程」に入会して二年が経ちました。毎月の投句と海程千葉句会出席、時に独り吟行など。俳句のお蔭で余暇長者は卒業となりました。(阿部 良治)

・現俳広報部では、「現代俳句」のテイータイム、随想のコナーを担当しております。ジュニア研修部にも所属しております。九月に行われたジュニア俳句祭では、披露を担当いたしました。(石井 浩美)

・まだまだ行きたい所、見たいもの等々が迫っており、近頃は少々俳句に遠いところにあります。それがいつか俳句の糧になるように！(興津 恭子)

・美しく移り変わる四季折々に俳句をやっている良かっと思ひます。(岡山 敦子)

**掲示板**

《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 増田斗志、香取哲郎、奈田光生

● 入会 (会員) 池田博臣、大見充子、高橋由樹、水戸吐玉、内海康男、中條雅夫、中村直子、塩川昭子、日吉亜弥子、星たかゑ、渡辺恵子

● 退会 (会員) 伊関葉子、片口 節

● 転入 (会員) 森須 蘭、高遠朱音 (東京都区より)

《平成二十六年年度第三回幹事会》

日時 平成二十六年八月二十六日(火)

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成二十六年年度秋の吟行会について
- 二、第一一四号会報について
- 三、現代俳句協会(本部)の動向について
- 四、第二十一回関東甲信越・静ブロック連絡会議報告
- 五、平成二十七年三月十五日(日)の総会・俳句大会について
- 六、市原ミニ吟行会報告
- 七、各研究句会の状況について
- 八、三十五周年記念俳句大会について
- 九、「現代俳句千葉」合本申込み状況について
- 十、十一月の幹事会の日時・場所について
- 十一、その他

□□事務局・編集部だより□□

● 秋の吟行会(佐倉・歴史民俗博物館)に参加された皆様、ごくろうさまでした。日本の歴史の深さには圧倒されましたね。

● 平成二十七年年度俳句大会の作品募集をしています。締切は来年一月三十一日です。どうぞお早めにご応募くださるようお願いいたします。なお、会員以外の方、他地区会員も参加できますので、よろしく。

● 千葉県現代俳句協会では五年ごとに記念俳句大会を開催していますが、平成二十七年十月二十五日には「創立三十五周年記念俳句大会」が開催されます。特別講演には宇多喜代子特別顧問をお招きします。演題はまだ決まっていますませんが、きつと心に残る講演になるでしょう。是非ご参加ください。

<p>現代俳句千葉 第一一五号</p> <p>平成二十六年十二月一日発行</p> <p>発行人 千葉県現代俳句協会</p> <p>会長 大畑 等</p> <p>現代俳句千葉編集部</p> <p>〒278-0037 野田市野田六六五番地</p> <p>松澤 龍一</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局</p> <p>〒270-1471 船橋市小室町二八〇四</p> <p>高木 一恵</p> <p>電話〇四七-四四七-二九一二</p> <p>FAX〇四七-四四七-二九七二</p>
--